

〈論説〉

『救荒本草』の科学性及び日本での受容

沈 雪 艶

はじめに

古代中国では災害が頻発し、飢饉を生き抜くために、人々は常にさまざまな救荒対策を実施していた。救荒における救荒故事と歴代の救荒政策及び実践例を文字や絵図の形で記録し、集成する書籍が次々と登場し、これらは総称して「救荒書」と呼ばれている。そのなかで、飢饉の際に普段は食用にしない野生の食用植物を利用して救荒に対処する。これを取りまとめた著述は、「救荒本草書」と呼ばれている。従来の救荒書は農学的内容を収録し、漢方薬分野の本草学とは無関係な存在であった。しかし、明代(1368-1644)になると、『救荒本草』の成立を契機に、農学と本草学の交流が次第に深まっていった。『救荒本草』は朱橚によって編纂され、本草の記述形式を借用しながらも、内容から見れば、農学と密接に関連している。こういったことにより、通常農書に分類されている。『救荒本草』は中国初の専門的な救荒本草書で、野生の食用植物研究においても新局面を切り開く画期的なできごとである。したがって、『救荒本草』の成立を境に、その後の救荒書は救荒本草書すなわち「救荒植物」という新しい分脈へ注目していく。王磐の『野菜譜』、鮑山の『野菜博録』、清代初期顧景星の『野菜贊』、陳僅の『濟荒必備』などは「救荒植物」についての専門書

として注目に値するが、いずれも『救荒本草』から影響を受けて成立している。

一方、『救荒本草』はその「農学」、「本草学」、「救荒」における有用性と実用性で徐光啓『農政全書』の荒政部分に収録され、江戸時代に日本に渡り、日本の本草学者や農学者の注目を集めた。1716年、本草学者の松岡恕庵が『農政全書』に収録されている『救荒本草』の全内容を取り出し、その中の植物の和名を調べ、14巻に分冊し日本で初版を出版した。宇田川榕庵による日本で最初の体系的なヨーロッパ近代植物学紹介書である『植学啓原』は、日本の近代植物学用語の基盤を築いた点において特筆すべき文献であり、その中で一部分の果実分類用語は『救荒本草』に由来している。また、『救荒本草』の影響を受けて、国内の飢饉における経験を踏まえ、日本独自の救荒本草書も出されるようになった。本稿では、『救荒本草』の科学性を分析し、日本における伝承と変遷を整理することで、日本の本草学者がどのように『救荒本草』を吸収し、研究するようになったのかを考察していこうとするものである。

1 『救荒本草』の成立

1.1 救荒植物思想における知識的蓄積

検討を始める前に、まず押さえておかなければならないのは、「救荒」という概念である。中国古代科学技術史の先駆者である墨子によれば「五穀¹のうちの一穀が収穫できなければこれを饑、二穀が収穫できなければこれを早、三穀が収穫できなければこれを凶、四穀が収穫できなければこれを餽、五穀が収穫できなければこれを飢と言う²。すなわち飢饉というのは、極端な食料不足の事態で、人々が飢餓状態に陥ることを指す。また、『国史大辞典』における「救荒」という言葉の定義は、「飢饉が実際に

1 五穀の内容が一定していないが、いずれも代表的な人間の主食である。

2 李小龍 訳注『墨子』中華書局、2007年、29頁

発生した際に行われる対応策のこと」である。古代中国では、戦争やさまざまな災害で、飢饉が頻発し、食糧不足による死は常に発生している。そのため、人々は何千年もの間、飢饉の年に備えてさまざまな救荒策を丹念に探り、あらゆる種類の食用植物を見つけようとしている間に、「救荒植物」という概念が明確になってくる。漢方薬分野での「本草」という名をつけているが、飢饉救済に焦点をあてた特殊なものであるため、本草学における「薬用」より農学における「食用」のほうが注目されている。『救荒本草』が成立する前に救荒植物を扱った文献がいくつか出てきた。

中国で現存する最古の薬学書『神農本草經』には、飢えを凌ぐ薬草の効能がすでに認められており、21種の食用と薬用が兼備された本草を「術、沢泻、薯蕷、薯実、旋華、青囊、麦開冬、茯苓、柏実、蕤核、榆皮、桑根白皮、葡萄、大棗、鶏頭実、瓜子、苧実、白蒿、藕実茎、梅実、薤」³がある。加えて、中国に現存する最古の農書である『汜勝之書』にも記録されている。『汜勝之書』は前漢・汜勝之によって編纂された農書で、耕作・種まきなど栽培全体に通じる方法、作物ごとの栽培方法を含め、前漢の農業をまとめた集大成である。もともとは2巻18冊であったが、北宋初期に散逸して、今は約3500字分の内容しか残されておらず、救荒植物について「稗を以て備荒食糧であると同時に牛馬の飼糧として有用であるため栽培すべきもの」⁴という説も載っている。

世界農学史史上最も早い農業専門書であり、かつ中国に現存する最古で最も完全な農書である『齊民要術』にも救荒思想が散見できる。例えば、巻五の「種桑柘第四十五」の部分では「榘熟時、多收、曝干之、凶年粟少、可以当食」と記載され、飢饉の年に備えるために、桑の実が熟している場合、より多くの収穫、乾燥、またコレクションをしておいたほうが良いという救荒対策である。著者賈思勰によれば、飢饉の際に野生の植物を食料

3 何慧玲 中国中医科学院修士論文『救荒類本草文献在中日两国的传承』2014年、19頁

4 鑄方貞亮「本邦古代稗作考」関西大学『経済論集』5巻1号、1955年、81頁

の代用として使うことは、考慮すべき非常に実用的な方法だという。それに前書と比べて、『斉民要術』に掲載された救荒植物の数が大幅に増加した。「蔓菁、梅、杏、桑、榆、棗、芋、稗」等記録されたうえに、「藕、蓮、芡」などについての栽培方法も掲載されている。以上挙げた農書は、救荒植物に関する中国初の文献であるが、栽培面にとどまっており、植物の形状や見分け方などについての記述はない。

宋の董煟が1194年に著した『救荒活民書』は、救荒書の歴史において画期的な著述である。著者は飢饉の年に飢えた人々を養うために、野生の食用植物を利用することについて言及している⁵。元の農学家王禎による『農書』は、総合的な農業著述である。全書は「農桑通訣」、「穀譜」、「農器図譜」の三部分からなっており、その第二部分の「穀譜」は「穀物、瓜類(実のなるもの)、野菜、果物、竹木、雑多な植物」など、さまざまな植物を扱っており、救荒用の食用植物も含まれている⁶。天野元之助は「穀譜」について、「『穀譜』では、本草学の成果を採り入れて、その性状、特徴、用途を述べ、また社会的需要を喚起してきた作物に強い関心を示している……元の勅撰『農桑輯要』以上に重要な記載を残している。」⁷と高く評価している。『王禎農書』がその後の農書及び救荒書に与えた影響については、ここで贅言するまでもない。

また、本草学の著作で挙げなければならないのは、北宋の蘇頌が編纂した『図経本草』である。従来の本草の主役は文字による記録であったが、薬草の数が増え、使用範囲が拡大するにつれて、すべての薬用植物の形態を正確に記述するには、文字だけでは少々不十分と思われるようになって

5 例として「飢年食蕨根，煮野菜，拾橡子，採聖米。凡可以度命之計者，随所在而為之，無遺法。」宋・董煟「救荒活民書」『中国荒政書集成』第一冊，天津古籍出版社，2010年，16頁

6 例として「夫蔬蔬，平時可以助食，歉收年歲可以救飢。儉歲可救飢；其果實，熟則可食，干則可脯，丰歉皆可充飢。」元・王禎「農書」『中国文化研究会編中国本草全書』二五七卷，華夏出版社，1999年，5頁

7 天野元之助『中国古農書考』龍溪書舎，1975年，155頁

た。そこで、薬物図譜という形態での補助的記述が登場した。659年、唐高宗の勅によって李勣らが『新修本草』を編纂した。全54巻の本書は、『本文』二十巻、及び『薬図』二五巻とその説明書『図経』七巻よりなり、本草史上図を採用する先例となった。しかし、原書も図譜も北宋の頃にはすでに失われた。したがって、北宋政府は薬物の鑑別を容易にするため、唐『新修本草』の『薬図』の形式に倣って全国に薬図や薬物の標本を集めるよう勅令を出した。それを蘇頌らが整理し編集したのが『図経本草』である。1061年に完成し、翌年に刊行された『図経本草』は、現存する中国最古の動植物図鑑である。また朱橚王府の左長史であった下同による『救荒本草』の序によれば、「是編之作、蓋欲辨載嘉植、不没其用、期与『図経本草』并伝于後世」⁸とあり、朱橚が図を採用して『救荒本草』を編纂したのは、『図経本草』の経験を生かし、次世代へ伝承していく為であったことが分かる。

そのほか、北宋蔡襄の『荔枝譜』や劉蒙の『菊譜』、南宋韓彦直の『橘録』や陳旉の『農書』、元代の『農桑輯要』や、魯明善の『農桑衣食撮要』などは、いずれも中国における重要な食用植物学的著作である。一方、元代には「金元医学の四大家」の朱震亨、『飲膳正要』の著者太医忽思慧、『診家枢要』の著者滑寿などの名医が登場し、理論が精緻化し、実践に注意を払い、明代には食事療法の理論と実践がさらに統合された。

前述したように、明代までの救荒植物思想は、遅くとも前漢時代に芽生えており、主に各種の農書、医学書及び救荒書に記載されていたことがわかる。にもかかわらず、救荒植物に焦点を合わせたのは、朱橚の『救荒本草』が出版された明の時代に入ってからのことである。

8 浅見恵、安田健訳編『救荒本草（和刻本）近世歴史資料集成』第四期第十巻、2006年、8頁

白杉（1996）訳文：「是の編の作らるるや、蓋し嘉植を辨載し、其の用を没せざらんと欲し、『図経本草』と並びに後世に伝へられんことを期す」

1.2 『救荒本草』の科学性とその背景

『救荒本草』は明の永楽の初めに、明太祖の第五子周定王朱橚によって編纂され、飢饉の時期に食用に供することができる414種類の野生植物を図説した著述である。『神農本草経』によって確立された「上薬」・「中薬」・「下薬」という三品分類法を採用せず、自然の特性よりも食用という実用性に重点を置いており、全書は草（245種）・木（80種）・米穀（20種）・果（23種）・菜（46種）の五つの部門に分けられている。さらに、五部ごとに「葉可食」「実可食」「葉及実皆可食」「根可食」「根葉可食」「根及実可食」「根笋可食」「根及花可食」「花可食」「花葉可食」「花葉及実皆可食」「葉皮及実皆可食」「茎可食」「笋可食」「笋及実皆可食」に細分されている。可食部に焦点を当てたこの分類法は、有用性の原則に基づき、日常的な植物利用の指導に資するものである（表1）。

表1 『救荒本草』五部分の分類

	1. 草部 (245種)	2. 木部 (80種)	3. 米穀部 (20種)	4. 果部 (23種)	5. 菜部 (46種)
1. 葉可食 (237種)	40種本草原有 123種新增	8種本草原有 33種新增			14種本草原有 19種新增
2. 根可食 (28種)	9種本草原有 15種新增			2種本草原有	2種新增
3. 実可食 (61種)	4種本草原有 16種新增	6種本草原有 14種新增	7種新增	10種本草原有 4種新增	
4. 葉及実皆可食 (43種)	6種本草原有 6種新增	5種本草原有 3種新增	5種本草原有 8種新增	4種本草原有 1種新增	3種本草原有 2種新增
5. 根葉可食 (16種)	4種本草原有 7種新增				1種本草原有 4種新增

6. 根笋可食 (3種)	3種本草原有				
7. 根及花皆可食 (2種)	2種本草原有				
8. 根及実皆可食 (5種)	1種本草原有 1種新增			2種本草原有	1種本草原有
9. 花可食 (5種)		5種新增			
10. 花葉皆可食 (5種)	2種本草原有 2種新增	1種本草原有			
11. 花葉実皆可食 (2種)		2種新增			
12. 葉皮及実皆可食 (2種)		2種本草原有			
13. 茎可食 (3種)	1種本草原有 2種新增				
14. 笋可食 (1種)		1種本草原有			
15. 笋及実皆可食 (1種)	1種本草原有				

また、細分された各部分は、「本草原有」と「新增」の枠で個々の植物を記録している。「本草原有」の枠では治療のための漢方薬であることを示している。編集者はそれを篩にかけ、救荒のための新たな食料としての価値を再発見した。また、元の旧本草にない「新增」の枠では、376種類の新植物を掲載し、植物の記述、分類、加工に関する分野に新境地を開いた。要するに、『救荒本草』は本草の記述形式を借用しながら、今までの伝統的な本草分類法から脱出し、かつ頑固な伝統を破ることについて、白杉悦雄は「新しい分類規準を採用させたばかりか、植物学的記載という点

でも『救荒本草』は画期的な書となったのである」と評価している⁹。

『救荒本草』には、朱橚は観察、実験、作図などきわめて科学的手段を使って記録している。下同による『救荒本草』の序によれば、「于是購田夫野老、得甲坼勾萌者四百余种、植于一圃、躬自闕視、俟其滋長成熟、乃召画工繪之為図」¹⁰とある。朱橚は多くの実地経験豊富な薬草学者を組織し、植物を採取して薬草園に移植し、これらの植物の形状や特性などを自ら観察した。また、人手を組織して植物の検査、採取、植え付け、効能と毒性の評価と検証を行い、図解の形で記録し刊行している。したがって、朱橚は領地の人々のために、食用できるかどうかを確実に区別する目的で、実用的な救荒書を作り出して、時代を超えた科学的価値を持っており、それも本書の大きな特徴である。

一方、朱橚らの観察・研究は薬草園だけでなく、今の河南省各地への現物標本の収集も行われていた。王星光の統計によれば、『救荒本草』に掲載される野生植物の地域分布は、密県の韶華山と梁家衛山、輝県の鴉子口山と太行山、鄭州の賈裕山、滎陽県の塔兒山、南陽市の馬鞍山、開封市郊外の中牟県と祥符県が最も多い¹¹。要するに、当時朱橚の藩である開封を主軸とし、北は太行山脈西麓の輝県、南は桐柏山と南陽、西は洛水と嵩山、遠くは陝西の華山と太白山にまで及んでいる。また、掲載される植物の項目で、先行する本草書に記載される形状よりそれらの生産地を優先している。例えば、「207鶏冠果」の項目で、「一名野楊梅。生密県山谷中。」¹²から始まり、後ろに鶏冠果の形状と気味が付いている。また「313青檀樹」

9 白杉悦雄「『救荒本草』考」『中国思想史研究』19号、1996年、215頁

10 浅見恵、安田健訳編『救荒本草（和刻本）近世歴史資料集成』第四期第十巻、2006年、8頁

白杉（1996）訳文：「田夫野老に購ひ、甲坼勾萌する者四百余种を得て、一圃に植え、躬自ら闕視し、其の滋長成熟するを俟ち、後画工を召して之を絵き図を為らしむ」

11 王星光『朱橚生平及其科学道路』鄭州大学学报、1996年第二期、14頁

12 朱橚『救荒本草校訳与研究』中医古籍出版社、2007年、168頁

の項目で、「生于牟南沙岡間」¹³から始まり、あとに青檀樹の形状が付いてくる。この点について、白杉悦雄は博士論文の『救荒書の思想史的研究』で「これは『救荒本草』が領地の民を対象とし、かつ飢饉の際の実用的マニュアルとして編纂されたことに起因する」¹⁴と判断している。

さらに、本書は地理的分布や環境によって植物の品質がどう変わるかについて、より詳細かつ確かな記録を行っている。例えば、「椒樹生武都川谷及巴郡帰峡、蜀川陝洛間人家園圃多种之。……此椒江淮及北土皆有之。蓮実皆相類、但不及蜀中者皮肉濃、腹里白、气味濃烈耳。又云出荊州西城者佳。」¹⁵とあるように、椒の木は江淮地域や北部でも栽培されているが、四川で栽培されている品種ほど芳香を放たない。『救荒本草』において、そういった植物産地に関する情報を工夫した編纂方針では、以後本場の薬草の栽培、開発、研究のための貴重な資料となることもあれば、日本の本草学者たちにも深い影響を与えることもある。

『救荒本草』の科学性において特に目を引かれる部分は、加工処理の施し方である。生薬のほとんどは植物の根や葉であるが、その中には毒性を含むものも多く、古今東西の生薬に関する本草書は、有毒、無毒、大毒、小毒の記録を重要視してきた。病気の治療にもその毒性に特別な注意が払われるのは言うまでもないが、飢民の食事に使われるため、植物の毒性の有無は、とても重要なことである。本書に収録されている植物は食用とするため、毒性のある植物調製法が十分記録されている。

例として、黄精の調製法については『如此九蒸九暴，令极熟，若不熟，则刺人喉咽。』と書かれており、これは蒸して乾燥させることを繰り返し、植物に含まれる有害成分を除去し、食用効果を高めるものである。白屈菜の場合は『采葉，和浄土煮熟，撈出，連土浸一宿，換水淘洗淨，油塩調食用』と書かれており、これは植物の葉と汚染物のない土を一緒に煮込み、

13 朱櫛『救荒本草校訳与研究』中医古籍出版社，2007年，270頁

14 白杉悦雄 京都大学博士論文『救荒書の思想史的研究』1996年，41頁

15 朱櫛『救荒本草校訳与研究』中医古籍出版社，2007年，221-222頁

一緒に一晚浸し、水を変えて洗うという一連の操作を通して、植物の毒性を除去する方法である。すなわち土壌の化学的性質と物理的吸着能力を利用するという方法で、植物塩基の毒性を低減・破壊し、土の表面に吸着した有毒成分は、土をきれいに洗う際に廃棄されるので、安全に摂取することができる。現代の科学的視点から見ても、非常に有効的なアプローチである。では『救荒本草』に現れた実用的思考はどこから来たのか。

背景を探る手がかりの一つは、周定王朱橚の教育経歴にあるように思われる。明代初期、為政者は儒教倫理と権力の結合を推進し、より実践的であった。周定王の父である皇帝朱元璋は実用的な学問を提唱し、劉基、宋濂、陶宗儀などの儒家名士を尊敬し、「愛民体国」の儒教思想を広げる。一方、太祖朱元璋は庶民出身で十七歳の時飢饉と疫病のために父母と兄を失った。飢饉に苦しむ農民たちの姿は、朱元璋の家族の記憶に深く刻み込まれていた。したがって、王室の一員であった朱橚には、飢饉の経験がなくとも、親世代の歴史を心に刻み、劉基らの影響をも深く受けていた。

当時各藩¹⁶諸侯は文化的素養が高く、領地内の学風も好ましいものであったが、藩王としての周定王朱橚も例外ではなかった。彼の周りには、文学や医学などの分野で非常に優れた学者たちが大勢集まっている。彼らは助手であり、指導者でもある。朱橚王府の右長史であった劉淳は、南陽地方の学者家系の出身で有名な医学者でもある。また、王府の長史であった下同、王翰、名医李恒、王府の講師滕碩は、いずれも当時の名士であった。これらの学者たちは朱橚の成長に寄り添い、勉学を導き、文学と自然科学研究の両方に注目させ、有力な右腕となった。さらに、朱橚は書籍の収集と彫刻を重視し、孔憲易（1984）が明代『如夢録』の注釈書に「(王府の) 東の棟には墨の彫刻があり、西の棟には印刷され額装された本がある」と書いているように、本の収集だけでなく、彫刻や印刷も行っていたことがわかる。このように、朱橚の科学研究の基礎が固まった。

16 「蕃」という語は日本と違って固有名詞として、国を冊封された諸侯の領地を指す。領地のことは藩国とも呼ぶ。

2 『救荒本草』における科学性の伝承

2.1 中国での継承

『救荒本草』には数百種の食用植物が詳細に記録され、「食用性」「薬用性」に「救荒」という新たな有用性を持っているため、その後の医学書や本草書及び救荒書の重要な参考資料となっている。これらの著作は、『救荒本草』の科学的方法論を踏襲して、それぞれ独自の特徴を形成している。本節は、その後の救荒本草書をいくつか紹介していこうとするものである。

明代王磐による『野菜譜』には60種の野生食用植物が記録されている。著者は当時、江淮地区の飢饉を自ら体験し、被災者が山菜を食べているのを目の当たりにした。また、被災者が誤って毒のある植物を食べてしまうことを憂慮し、1524年に『野菜譜』を完成させた。この本に掲載されている植物は、すべて著者が実地で確認したものである。『野菜譜』の特徴は掲載されている植物ごとに原産地や収穫時期などの情報が付いている韻文¹⁷が添えられており、図解もついている。これは包括的で、すべての文が韻を踏んでおり、覚えやすく感じられる。

明代鮑山による『野菜博録』は1622年に編纂され、全書は3巻に分けられている。鮑山は安徽省黄山に7年間の隠遁生活を暮らし、自ら山菜を採っており、『救荒本草』や『野菜譜』を参考にしながら、「病気を癒し、飢えに備える」という目的で本書を作成した。『野菜博録』は草部2巻、木部1巻に分かれ、合計435種の植物が収録されているが、その中『救荒本草』から388種の植物が転記されている。

清の顧景星による『野菜贊』は1652年に完成され、救荒のため¹⁸の44種

17 例えば、茵陳蒿を解釈する項目で「青蒿儿，才発穎，二月二日春犹冷，家家競作茵陳餅。茵陳療病還飢，借問採蒿知不知。」という韻文が添えられている。

18 著者は序文に本書を作成した理由について「顧子婦里，歲丁壬辰，飢饉無食，藥藿之羹，併日不給。偕婦于野，採草根、実、苗、葉，遂不死焉。鼓腹自得，各為贊之，四十四種。」と述べている。

類の野生植物が掲載されており、説明は次の形式で記述されている。根、果実、苗、葉などの可食部が示されている上に、四字韻文で賞賛し、唄のように添えられている。以下の引用文は、黄精に記載のある語句である。

「三月生、苗高二三尺。柔莖竹葉、大約似姜根。生食戟喉。葉対生者曰正精、偏生者曰偏精。苗炸作菜、根阴乾、九蒸九晒、忌鉄器、可充粮。含一枚咽津、不飢。盖仙薬也。……充粮益臟、久服軽身。黄精悦性、茈姜健神。品編食料、功載仙經。」¹⁹。

『済荒必備』は清朝の陳僅が1847年に著した救荒本草書で、さまざまな医学書と救荒書を参考にして、救荒植物を研究対象に、それらの形状、摂取方法、効能などを記した文献である。序文には「用便観覧、且以備異時一得之助、亦兵可百年不用、不可一日不備之意云爾」と書いてあり、本書は救荒という目的で作成されたことを示している。全書は三巻にして刊行され、第一巻は『辟穀神方』で、過去の医学書における辟穀の方法45件が収録されている。第二巻は『代匱易知』で、穀物、野菜など65種の救荒植物が収録されている。序文に「如周憲（定）王「救荒本草」、徐元扈「野菜譜」、黄公「野菜賛」諸書、或未之寓目、或其操土音、不能辨其名物、乃只就前所易知者采辑。」²⁰と書かれているように、著者の陳僅は周定王『救荒本草』の学術思想を継承し、飢民にむけて語られる救荒書を作成したのである。

そのほか、特筆すべきことには、明代末に徐光啓によって編纂された『農政全書』についてである。厳密に言えば、これは農書でありながら、製糸・棉業・水利などについても扱っている。徐光啓は明代末期の有名な暦数学者で、号は玄扈である。当時は、西洋世界との交流が盛んになっており、スペイン商人の仲介でアメリカ大陸の物産が流入していた。こうし

19 清・顧景星「野菜賛」『中国文化研究会編中国本草全書』華夏出版社、1999年、273頁

20 清・陳僅「済荒必備」『中国文化研究会編中国本草全書』華夏出版社、1999年、498頁

たことを記述した上で、『農政全書』では西洋の技術を踏まえた水利についての言及もなされている。徐光啓の没後の崇禎12年（1639年）に彼の学生である陳子龍が整理し、刊行した書物を平露堂²¹原刻本という。平露堂本は農本3巻、田制2巻、農事6巻、水利9巻、農器4巻、樹芸6巻、蚕桑4巻、蚕桑広類（ワタ、アサなど）2巻、種植4巻、牧養1巻、製造1巻、荒政18巻、合計12部門60巻に分かれている。四十三巻から六十巻までは18巻の荒政で、『救荒本草』のすべてが荒政部分の四十五巻の後半から五十九巻にかけて収録され、全書の三分の一に収められている。六十巻は王磐の『野菜譜』である。要するに、『農政全書』は『救荒本草』から413種、『野菜譜』から60種、合計473種の植物を引用し、そのすべてに植物の画像が添えられている。

徐光啓は『救荒本草』の内容をやみくもに再現したのではなく、朱橚の実学主義を継承している。実地で観察用植物を植え付け、多くの野生植物を自ら食べたこともある。食べた植物はその項目の後ろに「嘗過（食べたことがある）」と記されている。例えば、「黄精苗」という項目では、「玄扈先生曰：嘗過。根本勝葉，苗亦恒蔬。」と記されている。また、いくつかの種類について、その食用価値を強調し野生植物への理解を深めている。例えば、「百合」に対して「嘗過。根本嘉蔬，不必救荒。」と指摘し、百合は単なる救荒植物としてではなく、良質な家庭野菜として食べることができるとのことである。

2.2 日本での受容

『救荒本草』は明王朝発展の画期的な成果であり、その影響は近隣諸国、特に日本にまで及んだ。17世紀末日本に紹介され、その実用的な内容、的確な記述、精緻な図解などの特徴から、日本の医学者や本草学者の注目を集め、日本版の『救荒本草』が次々と刊行された。さらに、多くの研究

21 平露堂は陳子龍堂号である。

文献が現れただけでなく、その影響を受けて日本独自の救荒植物書作もいくつか生み出されていった。

2.2.1 飢饉の続発

江戸時代、下層階級の人々の生活は非常に苦しく、多くの飢饉に見舞われ、病死、餓死、疫病で亡くなった人は多数であった。有名な飢饉は元和の飢饉（1615）、享保飢饉（1732）、寶歴飢饉（1755-1757）などがあり、荒川（1967）は「江戸時代に限れば、大飢饉と呼ばれるものは十回おこっている。」「その中で、とくに享保十七年の飢饉（1732）、天明の飢饉（1782-1787）、天保の飢饉（1833-1839）を経済史家は近世後期の三大飢饉と呼ぶ」²²と述べている。日本の医学者、本草学者、農学者たちは、飢饉の惨状を目撃し、中国の救荒思想に触発され、中国舶来の救荒本草書や辟穀方を参照し、民衆を飢饉から救おうとした。そのために自然界に存在するあらゆる食用植物を調査研究し、その経験をもとに野生植物の毒抜き方法や加工方法をまとめ、食料の代用となるものを作り、民衆の飢えを満たそうとした。

2.2.2 『救荒本草』の受容

『救荒本草』が日本に伝来した時期については、『中国医籍渡来年代総目録（江戸期）』によれば、『救荒本草』の伝来時期は1662年と1829年と記されている²³。したがって、17世紀後半には日本に伝わったと推測できる。しかし、日本の学者に注目されるようになったのは、『農政全書』が紹介されてからである。

潘吉星の調査によると、日本は1712年、1735年、1751年、1755年、1849年に『農政全書』など、中国から数多くの書籍を大量に購入してい

22 荒川俊秀『飢饉の歴史』至文堂、1967年、110頁

23 真柳誠、友部和弘「中国医籍渡来年代総目録（江戸期）」『国際日本文化研究センター紀要・日本研究』第七集、160頁

た²⁴ことが明らかになった。その時期から『農政全書』が流行していたことがわかる。江戸時代中期になると、前節で述べた飢饉の文脈では、日本の本草学者たちは『農政全書』から『救荒本草』を分離して出版するようになり、日本版では3つのバージョンが登場した。

日本の本草学者松岡恕庵は『農政全書』に収められた荒政部分にある『救荒本草』と『野菜譜』の有用性に注目し、それを取り上げて1716年に『周憲王救荒本草』という書名で和刻した。これは『農政全書』が陸東版の『救荒本草』を採録して周定王を誤って周憲王と記したため、松岡恕庵も『農政全書』の誤りを踏襲したものである。『周憲王救荒本草』は『農政全書』に従って配列されており、14巻に分かれている。1巻目に目録があり、2巻から14巻に、413種の植物（草部245種、木部80種、米穀部20種、果部23種、菜部46種）が掲載されている。中国版と同じく右側に図解、左側に解説という形で、各植物の名称、生産地、形態、飢饉に際しての食用方法などが懇切丁寧に記載されている。さらに、漢文に訓点を施し、植物の漢字名に和名を与えている。各項目の最後に、松岡恕庵による解説が加えられており、また、各植物の日本での呼称についても詳しく記述され、非常にわかりやすい構成となっている。しかし、天明8年（1788）に、木版本が京都の火事で焼失した。ここで付け加えておかなければならないのは、松岡恕庵が改訂した際、末尾に付された部分は『農政全書』に収録した王磐の『野菜譜』ではなく、姚可成が編集、改名した後の『救荒野譜』である。

松岡恕庵の学生である小野蘭山も有名な本草博物学者で、彼を中心とする「蘭山派」が漢方医学の主流となり、大きな影響力を持っていた。1799年、明嘉靖四年（1525）刊行の『救荒本草』に基づき、蘭山は松岡恕庵の『周憲王救荒本草』を訂正・補遺し、『救荒本草補遺』という書名で第二版を刊行した。

24 潘吉星『徐光启著《農政全書》在国外的伝播』情報学刊, 1984年第三期, 94頁

その後、小野蘭山の孫である小野蕙畝は1842年に第三版を『救荒本草啓蒙』という書名で出版した。第三版は『救荒本草』の植物414種、『救荒野譜』の植物120種、重複を除いて、合計488種の救荒植物の形状、生態、薬用方法、異名、方言名、類似品、引用文献名について簡潔に記述している。全書は14巻に分かれ、『救荒野譜啓蒙』と合冊されているが、絵図がついていない。「啓蒙」という書名でも分かるように『救荒本草啓蒙』は『救荒本草』の注釈書で、一般の人々に「日本産の救荒植物」の存在とその効用を説明し普及させることが本書の目的であって、仮名交じり文できわめて平易でかつ簡潔に書かれている。また、以前の和刻本に欠落している木部の山寨樹が、本書にも補遺されている。ちなみにこの第三版は徳川時代の学者に強い関心をもたれ、岡西為人博士が天野元之助に教える²⁵書信で、それに関する文献は15種類に達している。

2.2.3 日本での発展と深化

『救荒本草』は日本では非常に重宝され、本章の第1節で述べたように飢饉が頻発する社会の中で、江戸時代の医学者や農学者は食用植物に関する救荒類植物著作を数多く生み出すきっかけとなった。彼らは当時日本の植物における観察と記述をもとに、飢饉の背景を考慮しながら、図版入りの一連の救荒植物著作を編纂した。本節は主に『救荒本草』が日本に伝来してから編纂された救荒植物に関する著述を基に分析していこうとするものである。

『民間備荒録』は建部清庵が1755年に飢饉救済法を説くために著した本で、二巻に分けられ、おそらく日本で最も早く成立した専著であり、その後日本の救荒書の範例となった著述であるという一説もある²⁶。『民間備荒録』凡例で「荒政の談におよびければ、机上に有りし荒政要覧を出し見せられけるより、慨然として草根木葉、須臾の死を緩すべきことを悟り、此

25 天野元之助「明代における救荒作物著述考」『東洋学報』47巻1号、1964年、42頁

26 白杉悦雄 京都大学博士論文『救荒書の思想史的研究』1996年、56頁

書を編て」と書いてあることから、著者は飢饉の惨状を見ながら飢民たちを救うために本書を完成したことが分かる。同時に、明代俞汝為の『荒政要覧』及び巻十に収録されていた『救荒本草』から影響を受けたことも「凡例」に語られている。その中、上巻「備荒樹芸之法」は『荒政要覧』巻九、下巻「療垂死餓人法」「救水凍中死人法」「食生黄豆法」「食生松柏葉法」「辟穀法」「千金方」「食草木葉解毒法」は『荒政要覧』巻九附雑法に依拠して著述されたもので、下巻「食草木葉法」は『荒政要覧』巻十の「救荒本草」を受けたものである。白杉（1996）の説によれば、建部清庵が『救荒本草』の編纂方針を継承して、自分の経験知識によって一般的に見られる植物を取捨選択して、民衆のためにできるだけ実用的なマニュアルを作ろうとしたとのことである。

『備荒草木図』は建部清庵が1771年に文字を読めない庶民にも一見してわかるようにという配慮のもとに、図解の形式で救荒植物を示し、その漢名和称と食べかたを図中に記入した救荒植物書である。「和製『救荒本草』と呼ぶにふさわしい書であろう」と白杉（1996）が指摘している。さらに、全書には104種の植物が掲載されている。

『救荒孫之杖』の編纂者である枕雲洞主人は、天保飢饉を経験し、民衆たちに飢饉を乗り切るために飢饉救済に関する絵入りの救荒書を著した。本書には237種の食用植物が掲載されており、そのうち実類45種類、根類50種類、嫩葉類126種類、荒地に植べき物16種類で、それぞれの植物の摂取方法と禁忌事項を記載している。

『農家心得草』は天明飢饉を経験した大蔵永常が飢饉への備えを書いた救荒書である。飢饉の際に有毒植物の誤食を防ぐため、43種類の有毒植物を図で説明していた。各植物が精確に描かれ、和名と漢名、また毒性の程度も表示されている。その中には、有毒17種類、大毒23種類、小毒3種類で、すべて薬効がある。

『備荒録』は初瀬川健増が1904年に編集した救荒書で、『本草綱目』『大和本草』『救荒本草』など合計84種類の書籍を全編にわたって引用している。

まとめると、1771年に『備荒草木図』が成立する以前に、日本には三輪希賢の『救餓大意』を含め3冊の救荒書しかなかったが、白杉（1996）の統計によれば、天明飢饉の6年間に5冊、天保飢饉の7年間に31冊の救済書が完成されていた。即ち天明飢饉以降に急展開があったということになる。1712年から1755年にかけて、『救荒本草』が収録されている『農政全書』をはじめ、中国から数多くの救荒書や農書などが大量に輸入されるにつれて、18世紀前半は救荒書分野で勢力を伸ばしていた時期ではないかと推測できる。

おわりに

『救荒本草』が救荒専門書の歴史で新局面を切り開く画期的なできごととみなされる最大の理由は、野生の食用植物の中に「救荒」という価値があるからである。実用性と有用性を重視した科学的思想は、後世の救荒書また本草書の良き手本となり、同時に本草学と農学における研究の幅を広げた。その影響を受けて、中国と日本は飢饉救済を目的とした数多くの救荒植物書を編纂し、本草学、農学などの発展に大きな影響を与えた。

また、掲載される多くの植物に一定の薬効があり、病気の予防や治療ができると同時に、健康、美容、ダイエットなどの効果もある。現代社会において、栄養と健康管理の観点から救荒植物を再開発し、利用することができれば、効果的な補助調整法として有用であると思う。さらに、戦争が頻発する現在の世界情勢を鑑みれば、救荒植物に関する一定の知識を蓄えておくことも不可欠であろう。

参考文献

日本語文献

- 鑄方貞亮（1955）「本邦古代稗作考」『経済論集』5巻1号
白杉悦雄（1996）「『救荒本草』考」『中国思想史研究』19号

- 荒川俊秀（1967）『飢饉の歴史』至文堂
矢部一郎（1984）『江戸の本草：薬物学と博物学』東京サイエンス社
真柳誠、友部和弘（1992）「中国医籍渡来年代総目録（江戸期）」『国際日本文化研究センター紀要・日本研究』第七集
天野元之助（1964）「明代における救荒作物著述考」『東洋学報』47巻1号
天野元之助（1975）『中国古農書考』龍溪書舎
白杉悦雄（1996）京都大学博士論文『救荒書の思想史的研究』
浅見恵、安田健訳編（2006）『救荒本草（和刻本）近世歴史資料集成』第四期第十巻
岡西為人（1980）『本草概説』創元社
牧野富太郎（1950）『植物記』桜井書店

中国語文献

- 北魏・賈思勰（1999）「齊民要術」『中国文化研究会編中国本草全書』華夏出版社
戦国・墨子（2007）『墨子・七患』中華書局
孔憲易注（1984）「街市紀」『如夢録』中州古籍出版社
宋・董煟（2010）「救荒活民書」『中国荒政書集成』第一冊，天津古籍出版社
元・王禎（1999）「農書」『中国文化研究会編中国本草全書』華夏出版社
清・顧景星（1999）「野菜贊」『中国文化研究会編中国本草全書』華夏出版社
清・陳僅（1999）「濟荒必備」『中国文化研究会編中国本草全書』華夏出版社
朱櫛（2007）『救荒本草校訳と研究』中医古籍出版社
王星光（1996）『朱櫛生平及其科学道路』鄭州大学学报第二期
潘吉星（1984）『徐光启著「農政全書」在国外的傳播』情報学刊第三期
張燮（2015）『从「如夢録」看明代藩王对開封經濟社会的影響』黑龍江史志第一期
何慧玲（2014）修士論文『救荒類本草文献在中日两国的傳承』
廖育群（2013）『扶桑漢方的春暉秋色』上海交通大学出版社
鄧云特（2020）『中国救荒史』商務印書館
国家図書館古籍館・《中国典籍与文化》編輯部（2016）『中国典籍与文化』第九輯

上海外国語大学校級规划項目「跨文化視角下的中日文化行為研究」階段性成果（項目号：2021114214）